

教育講演 4 筋・筋膜性疼痛の生理・病態・治療

12月15日(土) 18:25-19:25

会場：第1会場 テルサホール

新潟医療福祉大学リハビリテーション学部理学療法学科 田口 徹

司会 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 中野治郎

不慣れな運動後の筋肉痛、肩こりや腰痛、また、全身性の恒常的な激痛を特徴とする線維筋痛症など、筋や筋膜に起因する痛み（筋・筋膜性疼痛）の罹患者は極めて多い。筋・筋膜性疼痛は患者や高齢者の日常生活動作を制限し、QOLの低下を招くだけでなく、アスリートの競技パフォーマンスを顕著に低下させる。また、リハビリテーションを阻害する大きな要因であるため、高齢者医療やスポーツ医学に携わる理学療法士にとって極めて強い関心事である。筋・筋膜性疼痛は生存を脅かすほどではないものの、難治性で遷延化しやすく、加齢やストレスがその発症・増悪因子となるため、超高齢化かつストレスフルな現代社会において、臨床のみならず、社会的重要度が高い。筋・筋膜性疼痛の克服のためには、筋や筋膜が痛みを知覚する末梢・中枢神経系における生理的な仕組み、また、その仕組みが痛覚過敏のような病態でどのように変化するか、さらに、どのような治療がどのような機序で鎮痛効果をもたらすか、つまり、「生理」・「病態」・「治療」の3つの側面をマクロ（個体）からミクロ（分子）まで体系的に理解する必要がある。実際、今日までの約半世紀で痛みの基礎研究は飛躍的に進歩し、驚くべき速度で知見が蓄積されている。しかしながら、その理解は主として皮膚の痛みについてであり、筋・筋膜性疼痛などの運動器の痛み（つまり、理学療法士にとってより重要な痛み）の研究は遅れている。その理由は、これまでに筋・筋膜性疼痛の測定法がなかったこと、また、研究対象となる動物モデルが確立されていなかったことである。我々はこれらの点を克服し、様々な実験手法を用いてその特徴やメカニズムの解明を試みている。本講演では、動物実験を軸とした基礎研究の観点から筋・筋膜性疼痛を概説し、これまでにわかってきた最新の知見を紹介するとともに、理学療法士が改めて筋・筋膜性疼痛の重要性を再認識する機会にしたい。